ある，したがって，この会誌に毎号最低一編の報文の発表をと考えた。おかげで Vol. 10，№5までに58編の報文を発表させていただいた（この考えは現在も継続している）。（参考，わたしは，昆虫に関する報文を各会誌とか単行本，その他に出しているが，その数が1994年末で 587編に達している）。兵庫県生物学会は，県下の高等学校の先生方が中心の学会で，わたしのように全くのアマチュアで，ただ単に「虫が好きだ」といった会員は大変少ないように思われる。

機関誌『兵庫生物』は，この50年間各巻平均して308ページとなっているが，第5巻の 452ページ，第3巻の437ページと大変多くの報文が発表された巻もあれば（その中でも第6巻，第2号と第3号の間に特別号として151ページの大冊『兵庫県植物目録』が発行されている），第10巻になると平均にも足りない225ページになっている。その間，虫についての報文は，各巻平均17編あるが（こちらも，Vol. 7が26編，Vol. 3～6が各20編以上の報文がある），第10巻になると9編に減少する。

これからの『兵庫生物』はどのように発展するのか，兵庫県の生物を中心にした研究調査の結果の発表の場として，おおいに発展してもらいたいと同時に「虫」についてのすぐれた研究発表を期待しているものである。

（たかはし　としお：常任理事）

『高校生物ハンドブック』発刊の思い出

内波　秀一

昭和30年代ころから，自然科学のあらゆる分野での大発展の影響による生物教育の教育課程の大変革がおこり，兵庫県生物学会の会員研究，研修活動が盛んになっていった。

研究誌として伝統と権威ある『兵庫生物』のほかに，高校教育研究会の『生物部会誌』を発行し，教員研修をめざした「現代生物学ゼミナール」も大学教授を招いて年に4～5回も開かれるという状況になった。

当然，活動のための基金をどうするかということが大きな課題となり，渋谷久雄先生（明石高校）を中心に県生物学会の事業として，問題集の発行，あるいは，生物実験書の発行が企画されて実行にうつされたが，県下全域の先生方の参加を得られずに数年で中止された。

一時は京都の数研出版社の問題集を兵庫県内版としてつくり，販売部数に応じて生物学会へ寄付していただくという苦肉の策もとられた。

昭和37年にわたしが県立夢野台高校に転勤し（当津先生が在勤中）昭和38年2月ころだったか，学習のまとめ編，問題編，実験編を一つにし，巻末にノーベル賞級の生物学史の紹介をのせて『高校生物ハンドブック』と命名する本を出版する企画がまとまり，編集長を当津先生，会計担当をわたくしがということで実施することに決定した。

初期の編集委員として熱心に出席された先生方は兵庫高校（室井　綽，岡村はた，近藤昭一郎），長田高校（安房　明，前田米太郎），葺合高校（渋野竜二，東　敏男），赤塚山高校（小久保富男，浜田史郎），須磨高校（東　克彦），明石高校（渋谷久雄，西敦義），加古川東高校（杉田隆三，伊藤幸夫），加古川西高校（金沢　竜），そのほかの先生方であった。編集長から各高校へ趣意書を送り原稿を書く依頼を重ね，段ボール箱数個の原稿が集まった。編集委員が分担して執筆し，昭和39年が初版だったと思う。1冊定価150円で1万冊余り印刷し，見本を発送，注文をとると1万冊突破，あわてて5千冊の増刷を依頼し間に合わせたことを思い出す。

それからは毎年，小改訂（訂正，問題のさしかえ）を行い，3年ごとに大幅改訂を行なうために，県下全域の先生（特に採用校）に案内し，須磨国民宿舎で反省会を開いた。編集委員会議は9月，10月の日曜日を利用して，会社の寮を借りて開かれ，本当に良い勉強会になったと思っている。

昭和42年ころは最盛期で2万冊をこえる発行，高校部の運営費として本部会計へ毎年約30万円の納入（高校部会でも一部利用）ができた。

その後，各出版社が，それぞれ，カラー版でみごたえのある問題集を出版しはじめ，兵庫県生物学会編の『高校生物ハンドブック』の売れ行きが低下していったが，事業の収益もさることながら，まとめ編，問題編，実験編の検討を通じて，会員相互の研修が大きな成果であったと思っている。　（うちなみ　ひでかず：常任理事）

“現代生物学ゼミナール”誕生・発展・終焉

安房　明

30年ほど前だっただろうか……「『生物物理』という雑誌を書店で見かけるようになりました。……（略）……新造語（？）が生物学の中にもふえて来て，めまぐるしいほどです。曰く分子生物学，曰く人間工学 etc.……生物学そのものが超スピードで進んでいるようです。毎日まいにち，生徒相手の神経の疲れる仕事にたずさわっている私達教師には，新しい生物学の動向を身につけるいとまがありません。しかし，少なくとも科学について関心を持つ私達としては，現代の科学の状況を正しく把握する必要があると思います。少しでも正しい把握をして正しい科学概念を生徒に伝えるのが，私ども理科担当者の責務だと思いますが，なかなかそこまで行かないのが現状です。このようなことを考えれば考えるほど，生

物学が更に加速度を増して，我々の手の届かない所に行ってしまうように感じられてなりません。

このようなときに，科学者たちの声を聞こうではないかという声があちらこちらで起こり，神戸支部を中心として，ともかく表記のようなゼミナールが発足しました。」

これは，昭和37年12月（1962年）発刊の『兵庫生物』で“現代生物学ゼミナール”の発会についてお知らせした文の最初の部分です。第1回の「最近の人類遺伝学」川辺昌太氏（神戸大学）36. 12. 9から始まって，翌37年には6回，5年後の昭和41年末で延べ30回というかなりハイペースの開催でした。「生体の神経調節機構」須田勇氏（神戸医科大学），「呼吸のしくみ」辻英夫氏（兵庫農科大学），「糖質のエネルギー代謝」大久保達也氏（神戸医科大学），「チトクロームについて」瀬屠一郎氏（大阪大学），「酵素－その構造と作用機作」松原央氏（大阪大学），「光合成の機構」田川邦夫氏（大阪大学），「DNA と蛋白質合成」深沢広祐氏（神戸大学）などの最先端の方面から，「コウノトリについて」森為三氏（兵庫農科大学・生物学会会長）・岩佐修理氏（長田高校），「ミツバチの科学」小森誠一氏（神戸大学），「台湾の植物分布」中西哲氏（神戸大学），「斑入りの科学」笠原基知治氏（法政大学），「天敵による害虫防除」守本陸也氏（武田薬品）など多方面に亘っている。

どんなテーマでどんな講師の方にお願いするかがいつも私の頭の中で浮遊していた。なにげなく人と話をしている時に，ふとテーマが浮かぶときもあれば，科学雑誌やラジオ番組のなかで聞いた人の話で，是非この人にお願いしたいと思ったこともある。私達に分かる程度の講演をして頂ける人を探すと言うことは，謝礼があまり出せないという事とからんで案外難しい事だった。従って，最初のうちは一緒に会の運営をした前田米太郎先生の関係で神戸大学の教授の方々や，私の関係で大阪大学の人々に多く登場して貰った。しかし，それでは限度があるので広く会員の方にお願いをした。回が進むにつれて，特に年配の会員の方から励ましの声をお聞きしたり，講師の紹介や会場なども多くの人からご協力戴いた。当時は若かったので，今から思うとこんな大家によく頼んだものだと驚く。

30回以後の10年間でも，石田寿郎氏（東京大学），大島長造氏（国立遺伝研），今堀宏三氏（大阪大学），小島吉雄氏（関西学院大），森主一氏（京都大学），奥谷禎一氏（神戸大学），新家（しんけ）浪雄氏（京都大学），下泉重吉氏（日本生物教育学会長），朝山新一氏（日本性教育協会），秋田康一氏（東京大学），林俊郎氏（東京大学），丸山工作氏（京都大学），朝日稔氏（兵庫医科大学），太田次郎氏（お茶の水大），吉良竜夫氏（大阪市大），広瀬弘幸氏（神戸大学）を初め多くの方々の名が見られる。また，現代化講座として佐藤磐根氏・清水晃氏・岩佐耕三氏（大阪大学）による連日の実験講座や，武田創氏（神戸大学）のご厚意による人体の系統解剖（観察）の3日間では，得難い貴重な経験をさせて貰った。また，「BSCS の基盤」石上晃氏（洲本高校）を初め会員の方々の教育研究の成果の発表や，東（ひがし）敏男氏・渋野竜二氏（神戸市立高）の「教材としての科学映画」も折に触れて数多く上映して頂いた。

「“100回はつづける”と，つい言ったことがついに現実となりました。会の誕生から今まで本当に多くの方々のご支援を戴きました。皆様に改めてお礼申し上げます。」と『現代生物学ゼミナール100回（1961～1979）』の報告に記した。この100回記念の「ペルーと日本　その意外な生物的関係」室井　綽氏（生物学会会長）で締めくくりとした。が，続行をと言う声が高かったので，対象を広げて進める事にした。と言うのは，この頃には生物関係の啓蒙書も数多く出始めていたので，最新情報に接し易くなっていた。ところが，古い実験施設のなかで授業を進めていた我々は，コンピュータ化したような最新の実験施設とは無縁であり，接触する機会もなかった。そこで「科学施設セミナー」と言うことで，縁故を求めて企業の施設を見学させて貰い，そこの研究者のお話が聞けないものかと考えた。しかし，このための交渉は一人の講師をお願いするようにはいかず，かなり手間取った。幸い会員の方々の力強いご協力で，幾つかの印象深い会が実現した。

＜日電理化硝子工場見学と講演　55. 6. 21＞，＜武田薬品京都試験農園見学　56. 5. 9＞，＜ニッカウイスキー西宮工場見学　56. 7. 6＞，＜大阪大学微生物病研究所見学と講演会　56. 12. 15＞，＜岡崎国立共同研究機構見学　58. 7. 25＞，＜三菱電機（株）中央研究所見学　59. 12. 10＞，＜酒造記念館見学と講演　61. 3. 3＞，＜武田薬品工業(株)中央研究所見学と講演　61. 10. 21＞，＜神戸市立須磨水族園見学と講演　62. 10. 19＞などである。中でも，阪大微研の場合は加藤四郎所長や田口鉄男付属病院長始め岡田善雄氏らの各教授が講演を引き受けてくれて，5つの講座となった。微研としてもこれは初めての一般向け大行事だったとの事，何だか申し訳ない感であった。

昭和63年度を最後に県立学校を定年退職するとき，このゼミナールが129回を数え，わたしの28年間の仕事は終わりました。会員の方から寄せられる声に励まされ，学会の柔軟な組織に助けられて私も楽しく続けて来ました。無理を承知で快く引き受けて下さった講師の方々に感謝申し上げると共に，長い年月このゼミを陰に陽に支えて戴いた多くの方々に心からお礼申しあげます。

（あわ　あきら）